

養護教諭の専門性の確立に向けて

西田倫子 松本訓枝 石井康子 泊 祐子 (大学) 原 永子 (岐阜市立藍川北中学校)

I. はじめに

社会の急激な変貌と共に不登校、ひきこもり、心身症の増加など児童生徒の健康課題は多様化し、その対応に養護教諭への期待が高まっている一方で、学校カウンセラーや栄養教諭の誕生などにより養護教諭の学校での健康の専門家というアイデンティティが揺らぐ状況もある。しかし、養護教諭はそのような状況にあっても、養護教諭としての「やりがい」や「生きがい」を頼りにして職務に献身している¹⁾。また、大谷²⁾は養護教諭のアイデンティティの揺らぎを危惧しながらも、養護教諭として、どのような時代や、状況にあっても、揺るがない「養護教諭の本質」があることに言及している。「養護教諭の本質」が明らかになった時、養護教諭は、養護教諭としての専門職のアイデンティティを確立し、これから益々複雑になるであろう社会の変貌にも揺るぎない専門性を高めることができると考える。

II. 研究の目的

岐阜県は明治38年全国に先駆けて学校に看護婦を配置した。その目的は、当時流行していたトラホームの校内での治療のためであった。しかし、明治41年に岐阜市立京町小学校(現在、岐阜市立岐阜小学校)に公費で配属された学校看護婦広瀬ます氏はトラホームの治療だけでなく児童の保健養護にも力を注いだ。それは、今日の養護教諭の職務に通じるものであり、本県には、そのことを裏付ける史料が山積している。そこで、本県が生んだ養護教諭の先駆者である学校看護婦広瀬ます氏の実践から、今日の養護教諭に引き継がれた“養護教諭の本質”について検討する。

III. 研究方法

本研究では、“養護教諭の本質”を時代を超えても変わらない養護教諭の信念としてとらえた。養護教諭の前身である学校看護婦広瀬ます氏の実践に関する学習会を開催した後、学習会に参加した現職養護教諭に、(1)広瀬ます氏から引き継がれた信念が何であったか、(2)自らの職務を支えている信念は何であるのかを中心に質問紙調査を行った。

1. 学習会『広瀬ます氏の功績から学ぶ』の開催

日時：平成20年12月6日(土)

場所：岐阜県立看護大学

目的：学校看護婦広瀬ます氏の足跡をたどることにより、養護教諭の専門性を明らかにする。

参加者：岐阜県内の公立学校に勤務する養護教諭38名(小学校16名、中学校11名、高等学校8名、盲学校・特別支援学校3名)の参加があった。

学習会の内容：学校保健、養護教諭の歴史に関する著書、『学校保健百年史』、『養護教諭職制50年史』、『岐阜県教育史』、『京町小学校の歴史』などにより収集した資料をもとに次の事項について事実のみを本研究の研究者2名(大学教員1名、現場共同研究者1名)が講義形式で伝えた。

- ・学校看護婦広瀬ます氏が誕生した時代の社会背景と学校教育の実際、当時の児童の健康課題について、スライドを用いて説明した。

- ・広瀬ます氏の執務の実際について、広瀬ます氏が衛生室で執務する姿の写真、当時の教員の集合写真を利用しながら説明した。

- ・広瀬ます氏の没後に京町小学校PTAにより建立された頌徳碑に刻まれた碑文と、昭和33年岐阜市教育委員会が作成した道徳資料『ぎふにすだつ心』を朗読し広瀬ます氏の功績を説明した。

- ・学校看護婦の時代から養護訓導へ、養護訓導から養護教諭への変遷について、それぞれの時代における養護教諭への期待とそれに応じてきた岐阜県養護教諭の研究組織(小中学校教育研究会養護教諭部会、高等学校学校保健部会養護教諭部会)について説明した。

2. 事前調査の実施

学習会に参加申し込みのあった養護教諭に学習会への参加意欲を高める目的で、学習会前に質問紙を郵送し、自らの職務について振り返ってもらった。質問内容は、養護教諭として「喜び」、「つらい」と感じたことをそれぞれ3つ以内の自由記述回答を求めた。

IV. 倫理的配慮

質問紙を配布する際には、参加者に本調査の目的を明らかにしたうえで無記名にし、個人が特定されないように配慮することを十分説明した。回答済質問紙の回収をもって本研究への同意とした。本研究は、本学研究倫理審査部会の承諾を受

けた。

V. 結果

1. 対象者の特性

調査紙を学習会参加者 38 名に配布、その内 30 名から回答があった（回答率 78.9%）。回答者の属性については表 1-表 4 に示すところである。

年代	人数
20歳代	5
30歳代	10
40歳代	9
50歳代	3
未記入	3

年数	人数
10年未満	9
20年未満	6
30年未満	9
40年未満	3
未記入	3

学校種	人数
小学校	13
中学校	6
高等学校	5
特別支援学校	1
未記入	5

区域	人数
岐阜	7
西濃	7
東濃	2
美濃	6
飛騨	5
未記入	3

2. 養護教諭の職務の喜びとつらさ（事前調査）

表5 喜びを感じた時（複数回答）

項目	人数(人)
①子どもが成長し、(自立する)姿を見た時	18
②子ども、保護者から感謝された時	13
③子どもの問題行動に改善がみられた時	8
④保健教育の時、生徒の反応が良かったと感じた時	4
⑤養護教諭・保健室の存在価値を感じた時	2
⑥子どもと心が通じた時	2
⑦仕事の成果が出た時(達成感を感じた時)	7
⑧子どもと一緒にいる時	2
⑨教職員が協力してくれた時	4

表6 つらさを感じた時（複数回答）

項目	人数(人)
①適切な対応ができなかったなど自分の力のなさを実感した時	11
②教職員・学校医との関わりが上手くできなかった時	5
③他の教職員と健康や教育に対する価値観が異なると感じた時	5
④一人勤務で近くに相談相手がいらないなど孤独感を感じた時	3
⑤生徒の死に直面した時	3
⑥学校保健に関する取り組みが継続されていかない時	3
⑦最後まで子どもの成長を見届けることができなかった時	2
⑧子どもの問題行動が顕著に現れた時	2
⑨研修する機会が少ないと感じた時	2
⑩前任者と比較された時	2

3. 広瀬ます氏から引き継がれた信念（表 7）

広瀬ます氏から引き継がれた養護教諭としての信念や考え方について回答された記述を意味ある文節で区切ると、86 の文節が抽出された。その文節の意味を考えて分類した結果 5 つの項目に分類された。以下では、項目を『 』、記述内容を「 」で示す。

文節の多い順に示すと次の通りである。

第一項目：『人間性・感性・資質』は、「根底にある人に対する深い愛情」「人の痛みを痛みとして感じ取ることができる感性」などであった。

第 2 項目：『保健学習・管理の目的と実践』は、「まず健康とあるように健康を第一に考えて伝染病予防や環境衛生に関することに努める」「健康課題や解決のために子どもの様子をしっかりとみること、職務の内容を通してその解決にあたる」などであった。

第 3 項目：『子どもを見る視点』は、「目の前にいる子どもの可能性を信じる」「自分にとっての損得ではなく、その子どもが何を望み、その子どもの限らない将来のために今自分がしてやれる最大限のことをする」などであった。

第 4 項目：『専門職のアイデンティティ』は「はじめての学校看護婦、失敗できないという思い」「学校の中の職務として、しっかり位置づける」などであった。

第 5 項目：『学校・家庭・地域との連携』は「子どもの手当だけで終わるのではなく、担任や保護者も巻き込み皆で健康を守っていく」「情報を発信し地域にそれを広げていく」であった。

表7 広瀬ますから引き継がれた信念 (n=86)

項目	主な記述内容
①人間性・感性・資質 (21)	最終的にはその人の人間性が大切ではないのかます先生はそれがある ・人の痛みを痛みとして受け取ることができる感性 ・根底に人に対する深い愛情 ・自分がなにかするんだという強い思いがある方と感じる ・知識とかの言葉だけでなく、自ら行動して伝えていくことが大切 ・子ども達に向かう姿勢も自身もおしず、献身的にあたられた姿が目につく
②保健教育・管理の目的と実践 (20)	「まず健康」とあるように子ども達の健康を第一に考えて伝染病予防や環境衛生に関することに努める ・常に勉強され、こどもたちが健康を保つための手立てを考え実行にうつす ・今ある痛みや苦しみを取り除くためには何をすべきか、考え、工夫を凝らし取り組み続け ・全ての子どもの健康が少しでも、整った環境のもとで健康で安全に学習できるように働きかけ ・子どもの健康を守るために(人の苦痛を和らげるために)無心になる ・今、子どもの健康増進のために、目の前にいる子どもに必要なことを自分で判断し企画、実践していく ・健康課題や解決のために子どもの様子をしっかりと見ること、職務の内容を通してその解決にあたる ・症状の手当だけでなく、予防や悪化させないための指導、見届ける
③子どもを見る視点 (17)	・目の前にいる子どもの可能性を信じる ・自分にとっての損得ではなく、相手(子ども)が何を望み、その子の限らない将来のために今自分がしてやれる最大限のことをしてやる ・どんなものであるとよりよく子どもたちのために生かすことができるのかアイデアを出し、それもすべて子どもたちの健康のためにだった ・子どもを大切にす
④専門職のアイデンティティ (16)	・はじめての学校看護婦、失敗できないという思い ・学校(教育の場)に養護教諭の必要性を確いた ・学校の中での職務として、しっかり位置づけること ・養護教諭という仕事に誇りをもち養護教諭としてありつけようとした ・草分け時代で、職務内容が際限なく行動され、こうした方の姿から、養護教諭という職種が認められてきたのだらうと思った
⑤学校・家庭・地域との連携 (12)	・子どもの心身の健康を支えていくには、子どもの達だけでなく、職員や家族、地域の人人々にも訴えていかなくてはならない ・子どもへの手当で終わるのではなく、担任や保護者も巻き込み皆で健康を守っていく ・問題を持っている子どもだけに限らず、周囲を巻き込んで解決していくことが大切であるといえる ・健康情報を発信し、地域に広げるという信念 ・父兄の健康相談までやるような家庭を見届けた援助

4. 自らの職務を支えている信念（表 8）

自らの職務を支える信念は、55 の文節が抽出され、表 7 と同じく 5 つの項目に分類された。

第 1 項目：『保健教育・管理の目的と実践』は、「子ども達一人一人が自分で自分の健康問題に気づき、予防していくことができるように

する」「健康教育こそが人が生きていく上で最も大切なことであり、学力も含めた人間の力の基礎である」などであった。

第2項目：『子どもをみる視点』は「子は宝、育てたように子どもは育つ」「目の前の子どもの課題はいろいろあるが、学校が楽しいとか自分が好きと思える毎日が過ごせるように支援したい」などであった。

第3項目：『学校・家庭・地域との連携』は、「保健室からの情報を発信し、家庭にも広げる」「周囲に自らの意見を語り、賛同者を増やして実行に結びつけていく」などであった。

第4項目：『専門職のアイデンティティ』は、「保健室はホッとできる場所であり人との出会いの場所でもあるので人の成長のためには欠かせない」「養護教諭という職名が担っている魅力」などであった。

第5項目：『人間性・感性・資質』は、「私のモットーは元気」「自分の思うようにはなかなかいかなくても、常に前向きに考える」などであった。

表8 自らの職務を支える信念

(n=55)

項目	主な記述内容
①保健教育・管理の目的と実践 (20)	<ul style="list-style-type: none"> 学校で身につけたことが習慣となり、その子が大人になっても継続するように指導する 子どもたち一人一人が自分で自分の健康問題に気づき、予防していくことができるように心がけがや病気をすること一つの経験として学ぶことができるような子どもとの関わりをしていきたい 子どもたちに健康に生きる力をつける 目の前にいる子どもに生涯の健康にかかわる力をどのようにつけることができるかについて考える 健康(教育)こそが人が生きていく上で最も大切なことであり、学力も含めた人間の力の基礎である
②子どもをみる視点 (16)	<ul style="list-style-type: none"> 充分に甘えた子が大人になったら自立できる=悪い子は一人もいない 子は宝、育てたように子どもは育つ 目の前の子どもの課題はいろいろあるけれど「学校が楽しいとか自分が好きと思える毎日が過ごせるように支援をする 来室児童が、どんな小さなことでも話を聞いてほしいという気持ちを大切に、まずは受容する態度が大切 その子どもにとって、どんな方法でどんな対応をすることが「一番幸せなのか」を大切にしている。 目先のことであれ、遠い先のものであれ、常にその子の幸せを願って関わる 子どもとの関わりで、時にはつらいと感じることもあるが、それを含めて子どもとの関わりを大切に、日々仕事を進めていきたいという思いが強い
③学校・家庭・地域との連携 (9)	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの健康実態では、他教師、保護者、地域関係者等どんな立場の方とも手を結ぶことが可能 保健室から情報を発信し、家庭にも広げる 周囲の人に自らの意見を語り、賛同者を増やして実行に結びつけていきたい
④専門職のアイデンティティ (6)	<ul style="list-style-type: none"> 保健室はホッとできる場所でもあり、自分を整理できる場所でもある。また、人との出会いの場所でもあり、人の成長には欠かせないものである 「養護教諭」という職名が担っている魅力がある
⑤人間性・感性・資質 (4)	<ul style="list-style-type: none"> 私のモットーは元気である 自分の思うようにはなかなかいかなくても、常に前向きにとらえる

VI. 考察

信念とは、人間の活動における行動や思考を規定するものと考えられる。今回、現職養護教諭への調査から抽出された『人間性・感性・資質』、『保健教育・管理の目的と実践』、『子どもをみる視点』、『学校・家庭・地域との連携』、『専門職のアイデンティティ』の5つの項目は、まさに、養護教諭の養護活動における行動や思考を規定するものであり、広瀬ます氏の時代を超えても変わ

らない、養護教諭の本質を構成する信念であると考えられる。

この5項目について記述内容をみると、将来のある子どものために健康な心身の成長を願い（『子どもをみる視点』）、安全を保持しつつ、健康に生きるための教育を行い（『保健教育・管理の目的と実践』）、地域や家庭にも働きかける（『学校・家庭・地域との連携』）養護教諭の姿がある。また、そこには、母親のような深い愛情を抱き、献身的（『人間性・感性・資質』）に学校という組織の中に養護教諭の役割（『専門職のアイデンティティ』）を位置づけようとする養護教諭の姿もある。それは、鈴木らが明らかにした「学校組織において疎外された状況下における養護教諭が、自らのアイデンティティや喜びを児童生徒との関係性に見出し、保健指導などの本来的な職務に加え、新たなカウンセリング的機能や母性的な機能を自らの役割として受け止めている」養護教諭像と一致する³⁾。また、事前調査の養護教諭のつらさ（表6）にみられるように、養護教諭は、一人職種である孤立感を抱いているが、子どものために行った働きかけや取り組みが、子どもの健やかな成長や子どもからの感謝の言葉によって自らの職務の役割が評価されることで「やりがい」「生きがい」を感じていると思われる。

高橋⁴⁾は教育という行為は、子どもに対する大人側のあるまなざしに支えられて成立するとし、その「まなざし」は、子どもとは何かという認識と、子どもとはどうあるべきかという期待であり、それらが密接に絡み合っていると言っている。養護教諭は、「子どもには可能性がある」「悪い子どもは一人もいない」といった、子どもを価値ある存在として十分認識し、「心身共に健康でなければならぬ」「生涯健康に生きていく力を身につけなければならぬ」といった期待を持って保健教育・管理といった執務にあたっている。それらの養護教諭の思考や行動を規定する根底には、『子どもをみる視点』と『保健教育・管理の目的と実践』という信念が密接に絡み合っていると考えられる。

また、平成20年1月に出された中央審議会答申では、養護教諭が学校保健活動の推進にあたって中核的な役割を果たしていることを明記したうえで、養護教諭は校内の関係者や地域の関係者などと連携をする上でコーディネーターの役割を担う必要があるとしている。このことを踏まえれば、表7・表8にみられる『学校・家庭・地域との連携』に関する項目は、まさに、今日求めら

れている養護教諭を支える信念である。そして、その信念を貫くためには「人が好きである」「自らが健康である」といった『人間性・感性・資質』に関する信念が土台となるであろう。

本研究で明らかになった養護教諭の信念に関する5項目は、広瀬ます氏の頃からの時代を超えてもなお、変わらないものであると思われる。

田澤は、臨床教育学の立場から、養護教諭はスペシャリストではなくジェネラリストであるとしている⁵⁾。確かに、今日の養護教諭はコーディネーター的な役割を担うなど、様々な職務内容を担っている点で田澤の言うようにジェネラリストなのかもしれない。しかし、本研究で明らかになったように、『人間性・感性・資質』、『保健教育・管理の目的と実践』、『子どもをみる視点』、『学校・家庭・地域との連携』、『専門職としてのアイデンティティ』という養護教諭としてのこれらの信念は複合的に絡み合っていると考える。こうした複合的信念が、時代を超えても、状況が変わっても変わらない大谷のいう養護教諭の本質であり、養護教諭の専門職としてのコアを形成しているのではないか。この点については、今後の課題としたい。

Ⅶ. 本共同研究により養護教諭の実践の方法として改善できたこと・変化したこと

大谷は、養護教諭が養護教諭としてのアイデンティティの揺らぎを感じる要因として二つ挙げている。その一つは、保健主事への任用や保健の教科の授業が担当できるとする兼職発令等に見られる養護教諭への社会からの期待の内容に関することであり、また一つは、スクールカウンセラーをはじめ看護師、栄養教諭といった養護教諭に類似する新しい職種が学校に配置されるようになったことである²⁾。

平成20年1月に出された中央審議会答申では、養護教諭が学校保健活動の推進にあたって中核的な役割を果たしていることを明記したうえで、養護教諭は校内の関係者や地域の関係者等との連携をする上でコーディネーターの役割を担う必要があるとしている。その状況を、杉村は、このような多様な役割を受け入れるのなら日々の職務は拡大していかざるをえず、それにとまって現場の養護教諭が不安感を増幅し、アイデンティティは拡散し、養護教諭が専門性を見失うのは当然の帰結であるとしている⁶⁾。

こうした現状において、岐阜県教育委員会指導主事、岐阜県小中学校養護教諭部会会長を務めた

経験がある現地共同研究者は、現職の養護教諭が年齢や経験年数を問わず養護教諭の専門性を明確化できないでいることに養護教諭の課題があると考えていた。現地共同研究者は、本研究を行うことにより、今までの曖昧に認識していた養護教諭としての存在価値や自らの職務を支えてきた情熱が養護教諭としての複合的な信念に裏付けられたものであることの確信が得られたことに満足している。なぜなら、広瀬ます氏から受け継がれた信念と現在の養護教諭の執務を支えている信念は本研究により普遍性をもち、それらの信念は養護教諭の専門性の確立の根幹を支えるものであることが明らかになったからである。

本研究の成果は、養護教諭の専門性追究の一助となり、これからの養護教諭を対象とする研修のあり方を考える上で大いに役立てていけるものである。

また、昭和11年岐阜市で全国学校看護婦協議会が開催され、「学校衛生婦職制促進連盟」が満場一致で結成され、養護教諭の職制化運動が全国的に展開されたという記録が残されている。それから88年を経て、平成21年8月岐阜市で全国養護教諭研究大会が開催される。先述した養護教諭の専門性についての追究は養護教諭の全体の課題でもある。そこで、養護教諭発祥の地、岐阜県において開催される本大会において、参加者に広瀬ます氏に関する資料をポスターやパネル等で提示し、かつ本研究の結果を報告する予定である。そして、全国の養護教諭に対して本研究で明らかになった養護教諭の本質について公表したいと考えている。

Ⅷ. 現場の養護教諭の受け止めや認識

『広瀬ます氏の功績から学ぶ』学習会には、岐阜県内各地から多くの養護教諭が参加した。参加した養護教諭の学習会後の感想では、本学習会により、今後の職務に対する意欲が喚起されたとするものや養護教諭としての研鑽を積むことの大切さを再認識したとするものなど、多くの意見や感想が寄せられた。また、岐阜県が養護教諭の前身である学校看護婦誕生の地あることを誇りに思う養護教諭も多くみられた。

<参加者の主な感想>

・広瀬ます先生のことを詳しく知りたいと思って参加した。とても勉強になり、なかなか広瀬先生のように朝から晩まで人のために働く力が私にはありませんが、そんな思い、気持ちを学ぶよい機会となりました。改めて養護教諭として働く

(働ける)ことに感謝してこの仕事を頑張っていきたいと思います。

・日本最初の学校職員としての「学校看護婦」がどんな思いだったのかなということに思いをはせ、感動しました。ますさんの思いが引き継がれ、今の日本の法律や制度として残っています。私もますさんの信念「子どものためにできることを惜しみなくやる」を受け継ぎ、子どもと関わっていききたい。

・広瀬ますさんの功績が今の私たちの職務につながっていることを改めて感じました。

・広瀬ます先生の『ぎふにすだつ心』に掲載されている内容やその功績に深い感銘を受けました。是非、広瀬ます先生のことを小中高等学校の部会で岐阜県の養護教諭全員に知ってもらいたいです。

・時代の変化により子ども達も変化し、私達養護教諭に求められるものも変化している中で、自己研鑽に努めなければいけないと感じました。

・広瀬ますという人の人生を通じ、岐阜県の養護教諭の歩みを知ることができた。私は先輩方が築き上げてくださった一番よい状態の中で働かせていただいているのだなと思います。後退させないように日々仕事に励みたいと思います。

・学習会に参加させていただいて自分たちの根っこの部分を学ばせていただいた気がします。

・広瀬ます先生が思っていた以上に素晴らしい方ということがわかりました。

・養護教諭の原点、子ども達を思う心を振り返りたいと思う。

・こんな会を待っていました。定期的開催されることを期待します。

Ⅷ. 本学（本学教員）がかかわったことの意義

[養護教諭の実践の改善]

養護教諭の専門性については、多くの研究者が独自のやり方で研究をしているが、なかなか結論を導くことはできないでいる。

本研究は、大学教員のアドバイスにより養護教諭の専門性を追究するために養護教諭としての「信念」から明らかにしようとした。そのことは、養護教諭の専門性追究の一助となったと思われる。また、明治41年に学校に配属された看護職者、広瀬ます氏の実践を解釈するにあたり、看護職者の立場や職務内容を理解している大学教員の助言は、非常に参考になった。

なお、交通の便からして立地条件のよい本大学において『広瀬ますの功績から学ぶ』学習会を開

催したことにより、岐阜県内の各地域の養護教諭が集まることができ、養護教諭同士の交流が深められた。

[大学教育の充実]

本研究で明らかにされた養護教諭の信念について、「養護概説」の授業において養護教諭を志望している学生に提示していきたい。

[養護教諭の生涯学習支援の視点]

本研究において開催された学習会『広瀬ます氏の功績から学ぶ』によって、養護教諭が自らの職務を振り返り、養護教諭としてのアイデンティティ確立に向けて今後も研鑽を積んでいくために必要な活力や勢力の活性化を図ることができたと思われる。また、本研究で明らかにされた知見は、今年岐阜市で開催される全国養護教諭研究大会で公表する予定である。

Ⅸ. 共同研究報告と討論の会での討議内容

[テーマ]

養護教諭を支えている信念とは何か、その信念がどのようにして形成されてきたのか

養護教諭 A

広瀬ますさんの実践を学ぶ学習会によって、子どもに関わり続けることの大切さを思い出した。高校生のときに初めて養護教諭の仕事を知り、先生から子どもに関わり続けることの大切さを教わった。その先生から「あなたは自分の力で変わったのだから、私への感謝は、あなたが養護教諭になったときに少しでも生徒達に返していってくれたらそれでいいのよ」と言われた。

養護教諭 B

新規採用のときに差別的な待遇を受け、日直を他の先生の2倍担当し、多くの印刷仕事を受け持っていた。あるときに、校内で救急車を呼ぶほど大きなけががあり、私なりの手当てを行った。その後、出張で学校にいないことを知った子ども達から「先生、いなくなるの。不安になるやん。」と言われた。その言葉が養護教諭としての大きな遣り甲斐になった。

結婚して子どもを持ったことによって、すべての子どもが本当にかわいく思えるようになった。子どもが支えとなり、学校に行きたくないことがあっても、学校の子供達に会いたい一心で学校に行きたくなる。

養護教諭 C

大学生の頃に、ADHDなどの発達障害の子ども達と関わるボランティアを経験した。そのときに、子ども達のよさを受け止められるのは養護教諭

であると思った。担任の先生が子どものよさを理解していても、そこには養護教諭とのズレがある。私は養護教諭として、大人への信頼感などを子ども達に持ってもらいたいと思っている。

養護教諭 D

養護教諭の養成課程では養護教諭の信念に関わることを学習したが、学校現場に入ると、その信念が揺らいだ。給与を得ているので、校内で役に立ちたいという思いがまず出てきて、養護教諭としてのアイデンティティが揺らいだ。研修で保健だよりを書いた際に、子どもの実態を書くことができない自分がいて、そのときに、養護教諭としての職務を遂行していなかったことを痛感した。ある先生が「養護教諭は八百屋ではない」と言われたが、この言葉は今で言えば「養護教諭は何でもある、何でも売っているドラッグストアやコンビニエンスストアのような存在ではない」ということだと考えている。

養護教諭 E

養護教諭として、若い頃と今ではこうあるべき、こうあったらというものが変わってきた。小学校に勤務していたときは、「子どもと一緒に」に活動することを重視し、目の前の子どもをすぐに変えたいと思っていた。その後、中学校に異動し、中学生は小学生のようにはいかないことを感じた。生徒に関わる場合に一步引いて、彼/彼女に何をすることができるのかを考え、子どもの成長を見据えた関わりへと変化した。子どもの成長から、養護教諭としての職務について教えてもらっている。

今、養護教諭として、こういう先生になりたいというものを持てるようになった。

養護教諭 F

新規採用されたときの小学校の児童数は 660 名で、命を亡くした子どもにも何もすることができなかった。私はその当時に子どものお見舞いに行ったぐらいで養護教諭としての仕事を何もできなかった。私が出産休暇に入ったときに、後任の養護教諭が亡くなり、幼稚園で講師をしていた先生が後任となった。そのときに、養護教諭の職務が軽く見られていると感じ、養護教諭の仕事の重要性を訴えたいと思った。長い間、小学校に勤務していたが、現在は中学校に勤務している。子どもの将来に向けて、私がどんなことを言い、子どもにどんな力をつけられるのかを考えている。私は、他の先生から「養護教諭は何をやっとるんだ」と言われたくないし、他の先生には負けたくないなので、私が養護教諭として知っている情

報を他の先生達にアピールするようにしている。
養護教諭 G

高校生のときに、今で思ったら授業をさぼって保健室へ通う中で、養護の先生が私の話に親身に耳を傾けてくれた。その保健室の先生を目指したいと思い、養護教諭になった。

藤木は、教師の信念が次のような過程で形成されるとしている⁷⁾。

- ・子どもの頃からの教師に対する理想的なイメージや教師になってからの教師像の構成、再構成の経験
- ・子ども理解、保護者理解、教師同士の理解といった役割取得の経験
- ・人間あるいは社会人としての経験から得た人間そのものに対する見方を左右する自己特性との結合の経験
- ・教育を行っていく上で生じる試案や葛藤（教育的内省）の経験
- ・教師の内面的作用や思考を活性化しやすくする研究会や研修会といった環境

藤木の論に依拠すると、討論会に参加した養護教諭は、教師像の構成・再構成の経験によって、役割取得の経験、教育的内省の経験や養護教諭としての信念を形成し、それらをもとに、日々子どもと関わっていると考えられる。

文 献

- 1) 岡東壽隆他：教師の勤務構造とメンタル・ヘルス；106-132, 多賀出版, 1997
- 2) 大谷尚子：養護教諭の今日の問題に関する、養護教諭の歴史からの一考察, 茨城大学教育学部紀要, 55 号；345-364, 2006
- 3) 鈴木邦治他：学校経営と養護教諭の職務(Ⅱ), 広島大学紀要(第一部), 第 43 号;153-163, 1994
- 4) 高橋勝：人は教育に何を期待してきたか, 「教育と教育観」；79-104, 文教書院, 2002
- 5) 田澤安弘：養護教諭のアイデンティティと臨床教育学, 北海道教育大学紀要, 第 55 巻；33-247, 2004
- 6) 杉村直美：養護教諭という職, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 第 51 巻, 第 1 号；75-86, 2004
- 7) 藤木和也：熟達する教師を支える信念の成長, 教育実践の知 1, 授業改善・進歩の教育実践, 2004